

女子短大生の絵画鑑賞に関する一考察

宮越敏夫

Female junior college students' appreciation
and understanding of art.

Toshio Miyakoshi

1 はじめに

ここ数年、表現(造形)指導法という授業を担当し、保育士、幼稚園教諭として身に付けておくべき、いくつかの技法を実際に試みるということを行ってきた。そこでは工程がはっきりしているため、学生達はあまり考えることもなく、作品をつくることができ、学生達の持っている豊かな色彩感覚が、存分に発揮されているように思えた。そこから彼女らがその豊かな色彩感覚をもつて作品を見たとしたら、どのように感ずるのだろうか、ということに関心を持った。そこで平成14年度と平成17年度の二回に亘って、ある画家の作品を学生に見せ、学生たちがどのように鑑賞するかを試みることにした。その画家とは知り合いであったため、学生の感想をそっくり画家に送り、画家がその感想をどのように受け止めてくれるのか、までを試みた。これはその記録である。

2 画家の絵 題名「壁」 作者 H・I 氏 60才代(元中学教師・自由美術協会所属)



3 平成14年度、学生の感想（70名中、内容の重複している感想は省き、37名分を掲載）

- S.I 長い年月の間にこの壁の周りでは様々なこと（戦争や環境の変化）が起こり、今に至るまで時代の変化をこの壁は見てきたのではないか、腐敗した様々な所や、汚れた様な所などにこの壁の歴史を感じた。落ち着いている様に見えるのが実は内面にか隠れた意志を感じる。何か強いものを感じる。
- T.I どう見ても壁だった。でも床と言われたら床かもしれない。でも、新しい壁ではなく、古い年季の入った壁で、高級感もあった。作者はきっと、そういった建物か何かを見て感動し、壁にも何かを感じたのだと思う。私も何かに感動したりした時に、言葉ではなくて、絵で気持ちを表現してみようという気がしてきた。
- H.I 私にはこの壁の良さがわからない。きっとアリになれば「すごい大きな壁だよ！」と思うだろう。ただ、その壁のでこぼこや、木の木目みたいな筋、色使いについては、すばらしいとは思わないが、どこことなく力強さを感じる。
- H.I この作品は茶色一色の壁だった。少し凹凸があり、その部分を見ると、私には、下の方には家（民家）らしきものがあつたり、上の方には山らしいものがあつたり、空には風が吹いているような、波（スクラッチした感じ）の形があつて、どこかの地域の風景を上から見て描いたものに感じた。
- Y.I 戦争で民家や木々が破壊されている様子。戦争の悲惨さを訴えている。世の中が戦争によって激しく荒らされていくことの酷さをまじまじと感じた。
- T.I 一言で「壁」と表現されているが、よく見てみるとその中にたくさんの風景が描かれているように感じた。また茶色というくすんだ色を使用していることから、今の日本の荒みきつた世情を悲観的に「壁」という閉ざしきつた表現をもって表しているのではないかと感じた。
- Y.I 戦争で街が壊れた焼け野原。戦争の辛さ、苦しさを表している。全体的に茶色と黒で埋まっていて何だか重く感じた。戦争後の焼け野原に見えた。
- M.O 山が沢山ある田舎町の地図に見える。屋根の上に雪が積もっていて、川が流れている。きっと町中は小さな問題から大きな問題まで抱えているのだろうけど、上から全体を見ていれば一見、穏やかに見える。
- F.O 川の絵に見えた。川の流れの、力強さを、表していると思った。嵐の時の荒れた川の様子だと思った。
- K.O 茶色一色で描かれている。この絵を描いたH・Iさんは何を悩んでいたのだろうか。「壁」という題からも感じ取れるように、冷たいような、厚い絵だった。しかし平面ではなく、でこぼこしている所がユニークだった。
- F.O 壁、汚れ、まっ白な、きれいな壁ではなくて、ある程度、古いものを表現したのかなと思いました。なぜかわからないけど、古びた感じがとても良いと思いました。暗い壁だな、とも思いました。もしかしたら、物理的な壁ではなく、心理的な壁かもしれないと思いました。
- Y.O 日本の古い壁。作者は何を思って「壁」を描いたのだろうか。ただの壁ではなく、凹凸があつて、すごく味わいがあると思う。昔からずっとある壁を切り取ったようだ。とても味わい深いです。
- K.H 閉ざされた世界を表現し、一人ぼっち、寂しさ、孤独を表現しているように思う。一見砂漠の砂嵐のようにも見え、一人で彷徨った様子にも見える。

- H.K 何を描いたのか分からないけど、山々や家、道が描かれている感じがした。夜、夕方の山道や家々。芸術家の作品というのは、独特で、Iさんは特に何を表現したいのかというのが分からなかった。けれど、色合いや引っかき具合が、何とも言えず、趣があるなあと思った。
- R.K でこぼこの壁、茶色と黒の色で描かれている。壁、土でできていた田舎の壁を表したのではないか、現代の壁はステキな模様ばかりだけど自然の壁も表情豊で温かみがあるんだということ。
- U.K 壁って何だ。壁とはこんな凹凸があるものじゃないと思う。私には家があって、その後ろに川があって、その後ろに山があるように見える。でもこの作品が作られた時代がもっと昔のものであったとしたら、その時代の壁はとても凸凹していたのであって、作者には、これが素敵な壁だったのかも知れない。
- H.K 古い木の表面、昔っぽさ、凸凹していて、空の上からとったどこかの地域の写真に見えた。
- K.S 壁（使い古した、年代を思わせるもの）新しく建ったばかりの頃の壁が時を重ね、色付いて、時代を刻みこんだ時代の色を表現している。コンクリートでもなく、田舎の藁土で固められた壁のようでもなく、不思議な質感のあるものだと思った。
- M.S 大小の空間があり、それを見ると、二つの山脈があるように思えました。二つの山脈を作者が乗り越えなければいけない壁として表現した。人生には乗り越えなければいけないものがあり、どんな壁につきあっても、めげずに励むよう伝えていると思い私も一度や二度の壁につきあっても、もっと大きな壁もあるかもしれないので、今を頑張れる、と思いました。
- M.S 上空から見下ろした町（都）全体の風景。山や丘に囲まれた中に栄える城下の壮大さを表現しようとした。城下の町がドーンとそびえるすごさを感じた。
- R.S 波の激しい様子、心が落ち着かず、あわただしい気持ちを表現、寂しいのかなと感じた。（作者の気持ち）
- Y.S 茶色い色が火事の後みたいに燃えた後のように見えて、山火事の後のように感じた。
- A.S 雲に隠れた、上空から見える街。曖昧に見えかくれする世界。雲や風の流れが見えて素敵。
- T.S まだらな壁。壁というのは、他人と関わっていく時のたてのようなものではないだろうか。人をよせつけたくないという一つの隙間もない壁の厚さを感じる。自分で壁を作っているのだが、誰かに壊してほしいと訴えかけているように思う。
- Z.T 小学校の体育館の用具室の壁を思い出した。木の皮のようなこの作品からは古い建物の淋しさ、懐かしさ、力強さを感じられた。小さい作品であったり、形のない作品は、何が描いてあるのか、と考えるまでに時間がかかり、難しい。美術家の人たちは、こういった作品を見て、どのようなことを感じるのだろうか。
- M.T 飛行機に乗って、上空から見た街並みみたいだった。B29から見た日本みたいだった。雲と街並っぽかった。
- A.N 月日を経て年とった壁が描かれている。作者は自分自身の過去を振り返り、今までの経験を壁の染みで表現しようとしているのでは。私は喜びの経験を感じ取ることができなかった。
- T.N 築100年の中学校の美術室にある、花瓶の中の底。 歴史の深み。100年の間に様々な事が起こり、多くの子供達が生活し、美術をしているのを直接見ることはできない花瓶の底。彼女（花瓶の底）は少しでも、いい気持ちで美術ができるように、花が長持ちするように陰ながら頑張っている。しかし、底の方まできれいにしてもらえず、水垢やほこりが溜まり、汚れてしまったが、とても深みがあり、いい味を出している。

- I.N まず思ったのは壁と聞いて、家の周りにあるものかと想像したが、見てみると、一体どこの壁だろうという気がしてきた。目に見える、物を遮るものとしてではなく、人との関係や心の葛藤も考えられるのではないか。
- T.H 土器か土壁の表面、古い家の壁が見てきた歴史、年月を経て、古くなって、より味が出てきた壁が表現されているように感じる。とても懐かしい感じと、少し淋しい気持ちがあった。現代の人が忘れていた何かを表現してあるように感じた。
- K.H とても厚い、硬い、壁のように思える。そんなに冷たさを感じない。何か、道がうっすら見えるような気がする。作者の人生の先が見え隠れしているような。でもそれは決して明るくは無く、何かがあるのか見当もつかない感じ。
- R.H 壁が描かれている。壁のゴツゴツしたところ、がよく表されているように見える。この作者は壁の冷たさの中にも暖かさがあるということを表したかったのではないだろうか。この作品は日常生活の中で必ずある壁は、いろいろな人を見て来ていて、その暖かさが染み込んでいる“みんなの壁である”ということを表した作品なのではないかと私は考える。
- A.H この作品を見てパッと感じたことは、作品と額縁がとってもマッチしているなあと感じた。なんだか木彫りの彫刻のように見えた。ジーンと見ても飽きないし、山にも集落にもみえてくる。見ていると、心がスーツとして気持ち良かった。
- M.H 作者が考える人生の「壁」、人生には必ずなんらかの障害があり、それを作者は「壁」として表現したのではないだろうか。私は川だと思った。流れるようなものが描かれていたので、川を表現したのではないだろうか、と思った。
- A.H 私は題名を見る前にこの絵を見たとき、雪の沢山降っているごつごつとした冰山だと思った。遠くから見るとただの茶色い絵に見えたが、近づいてよく見て見ると、微妙に色の濃いところと薄いところがあって、でこぼこしているように見えた。
- K.Y これは壁という作品だが私は地面だと思った。人間は何か悩みにぶち当たると、前に壁があるように思うが、本当は自分の真下に問題があるかもしれない、ということ表現しようとしていたのではないか。灯台もと暗し、というように自分の目の下は、そうそう見るものではない。だからこそ、悩んだときに前や上ばかりでなく、下も見て見なさいということかなど私は感じる。
- I.Y この絵を見たら「海？」と思った。特にポイントになるものは描かれていないし、なんとなく、流れているような感じがした。でも「壁」なら、部屋にある普通の壁ではなくて、何か・・・作者は問題を抱えていて、乗り越えなければならない「壁」を表現したのではないかと感じた。
- S.Y 壁の年月、何年も何年もその校舎にある壁がいろいろな風景を見守ってきた長老のようなもの。木の年輪のようなものが物が出ているようで色褪せた中にも重みを感じた。この「壁」は作者と同じ存在なのではと思った。この壁の中にたくさんの思い出が入っているような感じがした。
- M.Y 山脈が連なっている感じがした。作者が壁という題をつけたのなら、それは人生を表して、山脈とかけながら、越えるには努力、苦勞がつきものだと表しているようだ。固さ、力強さ、淋しさを感じた。
- R.Y 洞窟、壁のゴツゴツした感じ。色で、でこぼこした感じがあったので岩の塊に見えました。なので洞窟だと思います。

4 平成17年度 感想文 (51名中、内容の重複しているものは除き、25名分を掲載)

- K.A 彫刻したものに何度も何度も色を塗り重ねてある作品だと思った。黒っぽい部分があり、その中に少し明るい部分がある。闇の中に少し光が見える、そんなような感じがした。少し離れて見ると絵には斜めのような流れがわかる。何を表現したいのかよく分らない。土面(土)を表現しているような気もするし、濁った色の中にも光が見える。人の心を表しているような気もする。きっと言葉では表しきれない目には簡単に見えないものを表していると思う。
- S.I 急な斜面の山があり、その頂上に風が強く吹きつけている絵に見えた。展示されている作品は絵自体は小さいけれども、壮大な印象をうけた。題材はとても壮大なもので、その一部分を切り取って作品にしたという感じがした。風に強く吹き付けられている山の雄大さや強さを表しているのではないかと思った。又この作品は金色で作られているが、その金色の色は作者がどのような意図があって、このような色にしたのかと、不思議に思った。やはり、自分の訴えることが表されるために金色だったのか。不思議さが残る作品だった。
- S.A 展示された絵を見て、初め川を表現したものなのかと思った。しかし、しばらく見てみると、筆の運びがとても荒々しかったので海かと思った。そして次に炎ではないかと思い始めた。特に左上の部分に注目していると、燃え盛る炎が風に吹かれ、又火の勢いを強めているように見えた。遠目で見ると、ただのテレビの砂嵐にしか見えないが、近くで見るとその筆の荒いタッチが力強く感じた。なにより、なぜこの重々しい色にしたのか、それが一番気になる。
- T.K 私には川が右上から左下に流れているように見えた。そしてその川の両側に岩山みたいなものがあるように見えた。でもこれは本当に見えたというより、私の想像が呼びおこしたものであるという気がする。先生は「直感が大切」だとおっしゃっていたので、思いのまま書いた。
近くから見たら土のように見えたが、遠くから見ると山に夕日がかかりそうに見える。結局「その人の見方によって変わるようなもの」のような作品で、なんと答えていいかわからない。
- T.K ぱっと見たとき、なぜか荒波に見えました。とても力強さを感じました。もう一つ、窓から地上を撮っているように見えました。黒の色のところが山で、白の色のところは流れている雲のような感じに見えました。自分でもなぜこの二つに見えたのか不思議です。この作品は絵なのか、もしくは何かを削ってから色をつけたものなのか、何なのかわかりませんでした。よく見ると少しふくらんでいるところもありました。色も多く使われていないので、イメージがしにくいと思いました。でも、逆に自分だけのイメージが持てるとも感じました。どんな人間が何を想ってこの作品を作ったのか、とても気になりました。
- Y.K 「これは何だろう。」と思った。こういうものが芸術だと言われたら、私にはよくわからないと思った。すこし離れて見ると、黄土色に近い茶色がゆつくり溶岩のように、うごめいているように見え、少し気味が悪い。波のようにも、風のようにもコーヒーゼリーのようにも見える。もし風だとするのなら、原爆の後に瓦礫や砂が舞っているようなものに見える。決して気持ち良いものとしては見えない。もしかしたら妊婦の胎内や、人の脳の中かも知れない。ある空間にそれに近い異物が混ざっていて、だんだんと回りへと溶け出して行って、いつかは同じ一つのものになってしまうような感じがした。”さらさら”よりは”どろどろ”に近い感じで”早く”よりは”ゆっくり”という感じ。”軽く”はなく”重そう”で、額のせいかもしれないが、いつかあの黄土色のものが金色に輝くのかもしれないと思った。絵なのかどうか

からないが中学校時に美術でやった、金属の板に絵を描いて裏から釘や金槌でたたいて、その絵を立体的に浮び上げるというか、押し出すというか・・・そういうものと似ていると思った。以外と女性が作ったもののように思う。そして、よく見ると、以外と軽いもののように思う。

- S.K なにもない砂漠のような感じがしました。あの絵の中には何も無い、しかし何かある、そのような感じがします。心に何か引っかかる、その違和感が不思議です。正直なところ、その絵に描かれている確かなものがわかりません。何で描かれているのかさえ、わかりません。そもそも、あの作品に確かなものなど描かれていないのかもしれない。とても奥が深い作品です。ただ私が思ったのはあの作品の世界に自分がいたら、きつと寂しくて苦しいだろうということです。
- A.S 第一印象は何が描かれているのかわかりませんでした。次に金色の砂漠、砂煙?かと思いました。近くでよく見ると雲が霧の中が、一瞬晴れた時に見えた山脈のように思いました。金色と見えたのも白でした。金属性の板に描いてあるのかと思ったら、木のように見えました。そんなところですが、作品は第一印象が大切だと思います。何が描かれているのかわからないと、特に私のような凡人には訴えかけるものが伝わってきません。
- S.T まず私はこの作品を見たとき「何これ??」と思った。きつとこの作品を見た学生はほとんどそう思うだろう。茶色と黒、白を使っていること、木目のような柄があったことくらいしかわからない。でもその木目のようなものはとても細かく、その作者の繊細な感じが伺えた。よく見ると本当に細かい線が何本も何本も描かれている。線を描いたというより、細かい線に茶色で色付けしたような絵であった。私はこの作品から、とても寂しい感じが伺えた。そしてかなり年を重ねている人のような気がした。この作品を作った人はこの作品にどんな気持ちを込めたのだろう。なんかこの作品はこの人の人生のようなものが語られている気がする。黒い部分はその人の闇を表しているような気がした。何を伝えたかったのかよくわからないけど、自分でこの作者の気持ちを考えてみるのはおもしろいと思った。
- S.T はっきり言って、よくわからない。あれが何なのかかわからないし、何を表現したいのかもわからない。しかし、私が見て感じたのは、荒れ狂う波や、何か烈しいものだと思った。何故そう思ったかはわからないが、そう思った。また、あの作品はごく小さなものではあったけれど、あの小さなものの中に、作った人の気持ちがすごく凝縮されているなあと感じた。
- Y.T 薄い色調の中に暗い色が描かれているのではなく、暗い色の上にそれを覆い隠すように薄い霧がかかっているように思います。普通絵には内面をさらけ出すという感じがありますが、これはその感じがしない気がします。薄い幕の裏で見え隠れしている本当の姿、そんな感じがします。描き方には勢いがあり、その時の気持ちをストレートに表現しているのだと思います。
- Y.T 近くから見たら、佐渡と新潟本土に見えました。それに佐渡金山にあるような感じの作品だと思いました。一回佐渡に見えたら佐渡にしか見えなくなりました。でもよく見たら、浅く彫られていて、ちょっとした彫刻のようにも見えました。特に何にも考えないで、自分が思うままに作った作品のようにも見えます。あと先祖代々受け継がれてきた巻物のようにも見えます。色々な人それぞれ感じるものがあると思います。なにを伝えたいのかちょっとよくわかりませんでした。難しい作品でした。

- S.N 何でできているのか、何が表われているのか、わからない。あれは風だ。風の動きを表現したものだ。どこからともなく吹いてくる風。時にはそよぎ、時には荒れてくる見えない存在。だから作品を見ても何かわからないのだ。そうに違いない。あの作品は見るものではなく、感じればいいのか。あれは風だ。とても強い風。体を押すような一方通行の風。その場で廻る小さい風、が観えた気がする。
- I.N 正直言ってなんだこれ?って思った。まず、どのようにつくられたのか、材料は何か、何で描かれたのか全然わからない。木目のようなものが見えたから、木で作られたのだろうか。木目に絵の具を塗っただけで、あのような作品になるのだろうか。今まで見てきた絵と違い、何で作られたのか分からないような絵、何を描いているのか分からないような絵は、はつきり言って「わからない」と思う。人は自分が分からないものや理解できないものは、受け付けないと思う。私は受け付けないとはまでは言わないが、この作品は「なんだかわからない」と感じる。でも嫌いではなく、どちらかといえば、見ていて飽きないから好きである。
- M.N 全く意味がわからない作品だった。でも私には荒れ狂う海のように感じた。烈しい雨や、強風で荒れている波が表現されている作品だと思った。あれは鉄板に傷を付けて、その上から粘土を擦り付けている作品なのか?。技法すらわからない作品で、見た瞬間、頭にクエッションが浮んだ。
- K.N 第一印象は歴史の絵というか、物語などに挿絵として載っていきそうな絵だと思った。とても細かく描かれていて。第二印象は古い世界地図のようなものだと思った。とにかく紙が黄土色で、古いものという雰囲気が漂っていた。よく見るとそこには名のつく物や人が描かれているのではなく、木に何かを塗ったようなもので、木目や彫り方によって、また見る人によって作品が変わるようなそんな絵だった。塗料は決してきれいな色ではないのだが、額縁が金だからか少しきれいな輝きのあるものに見えることもある。私自身も見る時によって色々なものに見える。作者が何を表そうとしているのかが全く分らないのが本音だ。戦国時代の地図のような、又荒波のような、本当に見る度に変わっていく。温かさなどを感じることもできないが、私は「冷たい」という感情は持たなかった。作者はどんな想いでこの作品を作ったのだろう。
- M.N 人も立ち入ったことのない、深い壮大な山々の間の風の流れや水の流れのようなものを感じた。何か神様が仙人のようなものがいそうな、神秘的な感じと、どこか物寂しい感じがした。泥水が乾いて固まったような、銅版が錆びたような風に見えるが、どうやって作ったのか、とても疑問に思った。古くからある、神秘的な山々のイメージから、作者は老人で、自然の壮大な流れを表現しているように感じたが、実際はどのような人がどのような気持ちを込めて作りあげたのか、とても興味をもった。
- M.N どういう気持ちで表現したのかとても難しい。塗って塗って塗って、削って削って削ってといった動きからできたものだろうか。川の流れのような白い曲線などもあり、何かが流れているように感じます。色合いは茶で明るいイメージを持たないが、冷たく寂しいというイメージも持っていないような気がする。自分の気持ちの中で、流したいもの、世の中に伝えたいものがあるのだと思う。それがもし地球の環境を意図するものならばごみ問題、廃棄ガス、地球の温暖化などがあげられ、これ以上自然を汚さないでと伝えているのだろうかと感じる。
- S.H 最初近くで見たら、油絵なのか何が描いてあるのか見えなかったので、距離をおいて見たら、第一印象としては山々があり、川が斜めに流れている風景画なのかなと思った。でも、そん

なに単純なものではないだろうと思って考えたけど本当によくわからなかった。感じたものといえば、不気味な感じで竜や妖怪など、何か出てきそうな感じがした。地獄のような、悪い事をして、引き込まれていきそうな感じがした。部分的に白い感じの所があり、丸くて魂のようなものが、もわもわと湧き上がってきそうに思えた。やはり地獄にやられて死んだ人達の魂なのだろうか。遠くから見た時は藁で出来ているのだと思った。本当に何を表現したかったのだろうか。描いた人は男の人で中年の人だと思う。それが動物が描いたとすれば、鳥の糞で、くちばしで引っかいたのとも考えられる。絵ではなく、ダレが見ても、首を傾げてしまうからこそ、隠れた気持ちを感じて欲しい絵なののだと思った。こんな絵はあまり見たことがないが、とても面白いと思った。

M.H 私は雲や水、波などが蠢いているように感じた。それは滝のようでもあり、海のようにも見えた。色が茶系色で統一されていたが、あれだけ自然を表現しているように見えるのは素晴らしいと感じた。まるで蠢いている中に巻き込まれ、吸い込まれそうになる作品だ。絵と一体感が得られるのも魅力がある。作品を見て感じることで、自分が作者の気持ちをわかろうとするのではなく、この作品がこの作品が自分にはどう見えるかという思いが大事だと思う。人に言われて「ああ、言われて見ればそう見える」というのは、自分以外の人の見方であって、自分の見て感じたものではない。作品を見る時は、1人で見に行くべきだと、この作品を見て感じた。

M.M 山と川のように見えた。地面がパツクリと裂け、下に川が流れて入れような感じがした。作者は茶色、黒、白だけを使い何を描きたかったのだろうか。木目のようなものが見えるので、髪ではなく、木の上に絵の具で描いているのだろうか。遠近感を感じてくるが奥が深すぎて、私にはよくわかりません

R.M 茶、黒、白のみの作品で、鮮やかな色が使われていなくて、少し暗いイメージがあります。具体的なものは、あまり露骨に見えてきませんでしたが、黒い部分が山、もしくは岩などにも見えるような気がしましたし、白い部分が波のようにも見えました。その印象からか、すこし荒々しい感じがします。穏やかな心の状態なら、もっとやさしい色とか、丸い雰囲気のあるような作品になると思いますが、黒色の部分などが特に鋭い雰囲気を出していたので、冷たくて少し硬い感じがしました。そして、私の中でこのような作品の現物は、大きなイメージがあったのですが、(私の見たのが現物、もしくは現物と同じサイズだとすれば)小さい中にも、思いを沢山込めて作られたものなのかなと思われました。

A.M 作品を見て、ぱっと見ると木の表面にしか見えなくて、よく見ると黒いものが二つほどあって、それがカブトムシだというふうに想像してしまった。作者は男性ではないかと思う。あの作品を見て何を表現したかったのか、わかる人がいるのかなと思った。でも作った人や題名を見ないで作品だけを見て、想像することも楽しいなと思った。想像する力を養えてよいと思う。けどこの作品はなにを表したもののなのかなが答えが知りたい。

Y.M 作品を見て、正直よくわからなかった。けれど色や絵のデザインを見て、なんだか暗いような感じのイメージを持った。茶色で塗られている下にあるデザインはなんだか激しい感情を表しているように思った。絵を描いたのは直感で男の人かなと思う。この絵は、内面にある激しい感情を外に出さないように、出さないようにしていることを表しているように思った。

A.M 私はあの作品が、海や洪水などの水に流されている街に見えた。家が流されているように見えた。一旦そのように見てしまうと、他のものには見えなくなった。大人の作品が子供の作

イメージが鑑賞する場合、大きく影響していることがわかる。茶色と黒が主流であったため、明るい絵というより、暗い絵として、受け止めたようだ。

また、最初に六十代と作者のほしい年齢を紹介したため、戦争経験者と考え、そこからのイメージをふくらませた学生も多くいたようだ。絵を見る場合、先入観があるということが、いかに絵の見方を決定づけるかが伺われるところである。興味深かったのは「上から」という表現がみられたことである。「上空から」とか「山脈」とかいった表現は、より自由な見方の表れであるように思われる。これらの感想文から伺われることは学生達は的確に観察力を発揮し、描かれているものを捉えているということである。今後の課題として、題名等、できるだけ先入観を与えるものを排除して、しかもなお、自由な想像力を学生に発揮させるためには、どのように作品を学生の前に提示するのが良いかが課題であるように思われた。そこで17年度は絵の題名や作者に関することは、一切説明することなく、先入観が無いようにして作品を提示した。

17年度の感想では「わからない」という言葉が数多く出てくる。これは彼女たちの、何か質問を受けた時における習慣ともいえるものではないだろうか。今までの彼女達の小、中、高の教育では問題においては決まった答えがあるものだ、という勉強してきた。従って「絵」を観た場合でも、そこに何が描かれているかは、題名に示されているものであって、題名が教えられないことは、答えが隠されていると受け取るのではないだろうか。授業においても、様々な質問をすると、まず即座に返ってくるのは「わかりません」という言葉である。「わからない」ということがそんなに早く答えられるものかと思うのである。彼女達にとって答えとは自分で考えるものではなく、知識として記憶に残っているもの、知っているものということで、それを忘れたら、「わかりません」という答えになるのではないだろうか。

そこから「絵」を観ても「題名」を知らされていないことで、まず「答え」が隠されていることから来る不安感を感じるのでないだろうか。だから「わからない」という言葉をあげておいて、そこから自分なりの答えを考えているように思われる。

14年度と17年度の感想を比較したとき、題名や作者についての事前の知識が有るか、無いかの違いはあるが、その他の項目では驚くほどの共通性があるように思われる。17年度のS・Nの感想の中で「あの作品は見るものではなく、感じればよいのだ。」と書いているように学生達は色彩についての感じとか、作品のマチエールについての的確に作品の表現しているものを受け取っているように思われる。N・Hは「作品を見て感じることで、自分が作者の気持ちをわかっていくのではなく、この作品がどう見えるかという思いが大事だと思う。」と絵を見る上での大事な視点にまで言及している。

以上14年度と17年度の学生達の感想を見てきたが、改めて感ずることは20歳前後の学生たちの観察眼には鋭いものがあるという思いである。

6 感想文を見ての、作家の言葉（平成14年度の感想で）

…略…実を言いますとあの画題「壁」はなくてもいいものなのですが、どういうわけか私は若い頃から枯花とか、枯石榴とか骸骨といった命の果てたものに魅かれ、いつも土色(べという)で画面を塗り込めていたのです。

朝の散歩が私の日課ですが、その時もいつも何か、枯れたものとか、木の実とか拾って、部屋中散らかしています。そんな訳であの絵も、具体的に何を描いたというのではないのですが、そんな死者達の霊の様を具体化したかったのかも知れません。先日ある機会に詩人で美術評論家もやられる宗左近

氏の話聞いたのですが、当時「詩」という文字は言偏に寺と書くように死者と対話する事が、すなわち「詩」であると聞かされ、目から鱗の落ちる思いでしたが、私の絵の中にも、そんな死者との対話があればと願っています。そんな訳で「壁」と題した私の絵は学生さん達にイメージを固定化させてしまったのかもしれませんが、多くの感想文に古い壁に歴史をみるとか、風化された時の流れとか、人生の壁といった道徳訓まで「壁」という画題にとらわれてしまったようです。そんな中でA・Hさんの感想に「この作品を見てパッと感じたことは作品と額縁とがとってもマッチしているなあと感じた。」とありましたが、私としてはとても嬉しいです。感想はまた続き、「なんだか木彫りの彫刻のように見えた。ジッと見ているにあきないし、山にも集落にも見えてくる。見ていると、心がスーッとして気持ちよかった。」とあり、私のこころもスーッとしました。こんな人に私の絵が求められたらいいなあーと思いました。

私は数年前スペインの風景ばかり描いて半年ほど過ごしましたが、今はあの何も無い、ブッキラボウな風景に魅かれています。そんなことが、多くの学生さんたちに、何かわからんが、山や川や、部落のある風景に見えるとありましたし、焼撃後の街並みというものもありました。それらの感想を目にして、私はやはり風景画に霊(詩)を塗り込めることに自信がもてました。……略……

7 おわりに

ここにあげたI氏の作品からはマチエールの重厚さに、まず気づかされる。壁土の色といえようか、氏は「まずマチエールを作る」と話してくれたことがある。又「デカルコマニーに関心をもってきた。」とも、氏の作品の重要な要素としてこのマチエールとデカルコマニーが大きいと思われる。それは又自然と偶然とも置き換えられようか。氏は新潟県新発田市に住んでおられる。この土地は過去、画家として佐藤哲三、布川勝三等を生んだ地である。それらの先人は北国、日本海に望む風土というものを大事にし、まさに風土が生んだ画家といえよう。それらの精神の流れというものが脈々と氏の作品の中にも流れていると思われる。氏がマチエールをまず作ると言われたのは、単なるマチエールではなく、その風土の上に根ざすということの意味しているように思われる。デカルコマニーは偶然できた絵が様々に見えることから、精神分析にも用いられた。氏がデカルコマニーにも関心を持ったと言われることも、表面的ではない、深い精神性の追求といえるのではないだろうか。そうして出来上がった作品であるだけに、氏の作品は単純ではない。その作品を読み解くのは難解であるかも知れない。だが反面どのように見られても良いという、広い許容範囲を持っているともいえよう。だから氏は鑑賞者の見方で「ああ、そう見えるのかと思った。」こともあったという。今回、氏の作品を観た学生達の感想を見られた氏の思いには、氏の作品と学生達の感想を合わせて、新たな世界を見出そうとしておられるようにも感じられる。氏の誠実なお心使いに感謝申し上げて、終りしたいと思います。

